

## エンゲイジド・ブuddiズムと社会参加仏教

高野山大学 奥山直司

本発表は、エンゲイジド・ブuddiズム ([Socially] Engaged Buddhism) を取り上げ、その概念を検討した上で、我が国における受容または変容の様態に留意しながら、この種の実践の持つ可能性や問題点について考察を加えるものである。

周知のように、エンゲイジド・ブuddiズムは、ベトナムの禅僧ティク・ナット・ハン (Thich Nhat Hanh 釈一行、1926-) によってベトナム戦争中の1960年代初めに造語・提唱され、クリストファー・クイーンとサリー・キングの共編著『エンゲイジド・ブuddiズム』 (*Engaged Buddhism: Buddhist Liberation Movements in Asia*, 1996) を通じて欧米に広まった仏教の実践概念である。クイーンとキングを始めとするこの分野の研究者は、近現代の仏教者たちによる反戦平和、環境問題、差別や抑圧からの解放などに関わる新しい運動をエンゲイジド・ブuddiズムの名の下に一括する傾向がある。そのため、アリヤラトネ (1931-)、スラック・シワラック (1933-)、ロバート・エイトケン (1917-2010)、ジョアンナ・メイシー (1925-) といった代表的なエンゲイジド・ブuddiストのみならず、B.R.アンベードカル (1891-1956) やダライ・ラマ 14世 (1935-) の活動のような思想系譜を互いに異にするさまざまな運動がエンゲイジド・ブuddiズムの中に数え上げられる。

これらに共通するのは、阿満利磨 (『エンゲイジド・ブuddiズム』『京都・宗教論叢』第7号、2013年) によれば、社会的不正義や社会・国家が作り出す悪を人間の苦しみの原因と見なし、そうした問題の解決をダルマ (仏法) に基づいて果たそうとすることである。またエンゲイジド・ブuddiズムは、国民国家の形成と資本主義の発達という事態に仏教徒としていかに対応するかという摸索の中から生まれてきた面があり、その意味において、すぐれて近代的な所産であると言える。

我が国において、エンゲイジド・ブuddiズムは、欧米経由の新しい仏教実践の潮流の一つと理解されてきた。エンゲイジド・ブuddiズムという言葉には、まだ日本語の定訳はないと言ってよく、「社会をつくる仏教」、「行動する仏教」など踏み込んだ表現が試みられてもいるが、最近では「社会参加 (型) 仏教」という訳語が多く用いられるようになった。それは、2011年3月11日に発生した東日本大震災の復興支援活動に多くの仏教者が参加する中で、再び注目を集めている。

だが、これを社会参加仏教とした場合、従来の仏教的な社会福祉・慈善事業等との境界が曖昧になり、ダルマによって社会問題の解決を目指すというエンゲイジド・ブuddiズムの本旨が見失われる恐れがある。日本型エンゲイジド・ブuddiズムの確立は可能か。本発表はこのことについて考えてみる。またグローバル化の進展という新たな事態の中で、エンゲイジド・ブuddiズムがどのような変貌を遂げようとしているのかについても検討する。キーワード：エンゲイジド・ブuddiズム、社会参加仏教、近代